

セラミック九州

CERAMIC KYUSHU

佐賀県立九州陶磁文化館報
Kyushu Ceramic Museum News Letter

No.61

編集・発行 佐賀県立九州陶磁文化館

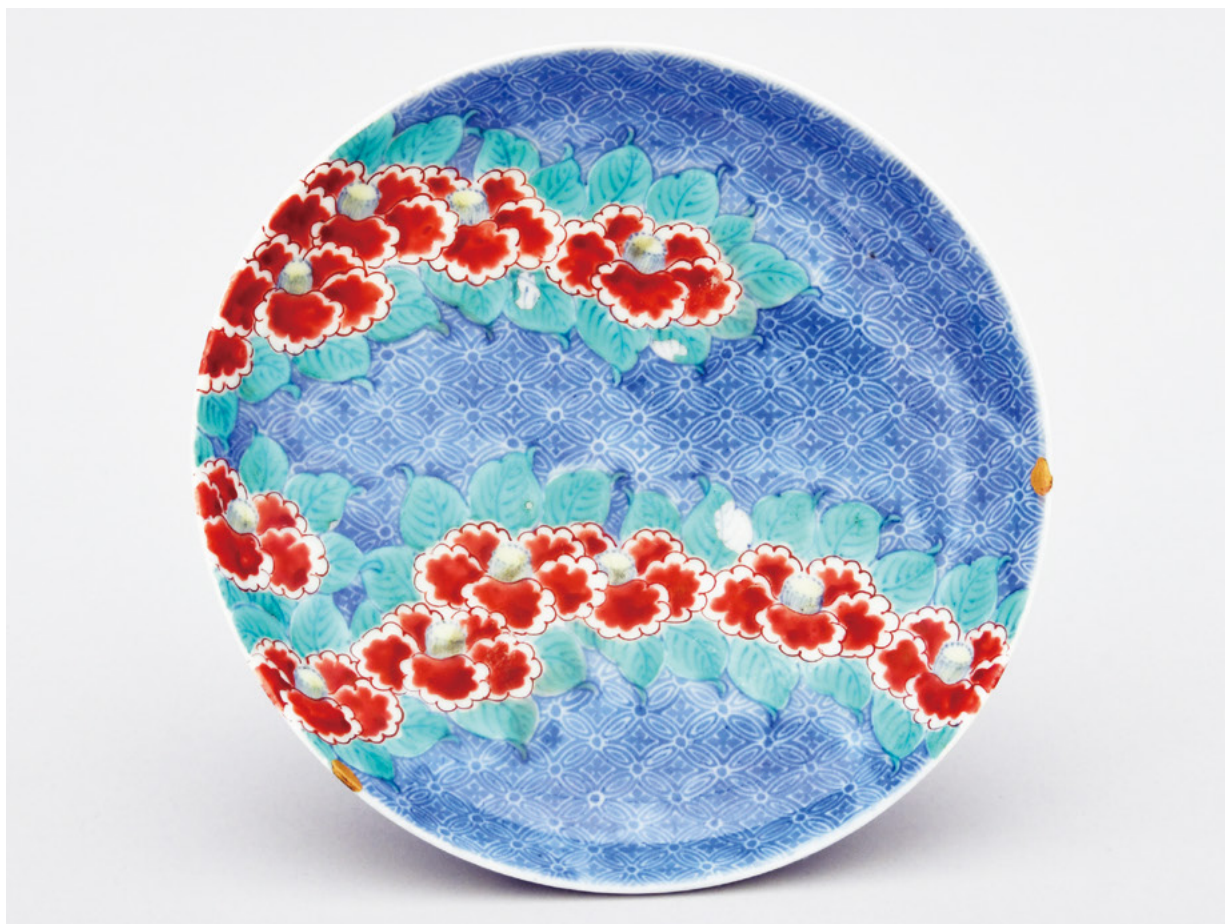
発行年月日 令和7年(2025) 3月19日

〒844-8585 佐賀県西松浦郡有田町戸杓乙3100-1

TEL. 0955-43-3681 FAX. 0955-43-3324

<https://saga-museum.jp/ceramic/>

E-mail: kyuto@pref.saga.lg.jp



いろ え つばきつなぎもん こ ざら 〈色絵椿 繫文小皿〉

ひ ぜん なべしまはんよう
肥前 鍋島藩窯

1670 ~ 1690年代

佐賀県立九州陶磁文化館 所蔵

しゃく ぎ こう
赤戯幸コレクション

口径15.1 高さ4.1 底径7.8

左方から椿繫文が上下二列に伸び、背景は墨弾きによる白抜きの染付七宝繫文で埋められている。椿の花は上絵の赤と染付線描きの花芯には黄色の絵の具が塗られている。赤の花文には盛期の鍋島に施される下書きの淡い染付線は見られない。器形はやや平たく、口縁は緩やかなカーブで立ち上がっている。裏面三方に唐花を配し、間を細い蔓の唐草文で埋める。高台外側の櫛歯文は短く描かれている。

—『寄贈記念展 赤戯幸コレクション』(2024年) より

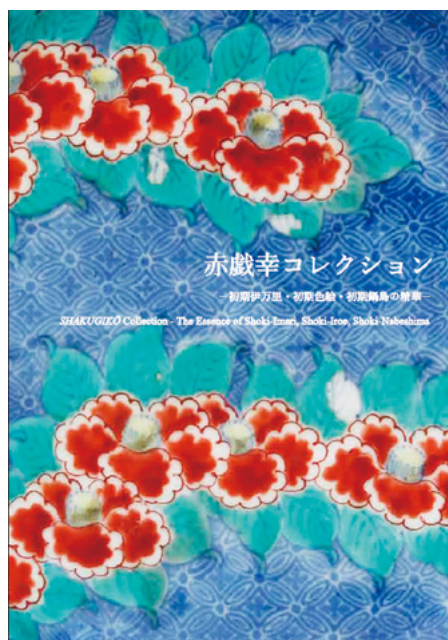
～令和6年度企画展の報告～

寄贈記念展 初期伊万里・初期色絵・初期鍋島の精華

— しゃくぎこう 赤戯幸コレクション —

令和5年度に個人蒐集家から寄贈された赤戯幸コレクションの受入れを記念し、初期伊万里、初期色絵、初期鍋島を中心に構成された上質な肥前磁器43件を初公開する展覧会を開催しました。日本磁器のはじまりである初期伊万里様式にみられるおおらかで自由闊達な筆致、初期色絵の大胆な文様と色彩のコントラスト、将軍家への献上磁器としての鍋島様式が完成する前に試みられた初期鍋島の多様なデザインなど、主に17世紀に生み出された磁器の魅力を堪能できるコレクションの全作品を紹介しました。

- 主 催 佐賀県立九州陶磁文化館
- 会 場 佐賀県立九州陶磁文化館
第5展示室、展示ホール
- 会 期 令和6年(2024) 6月1日(土)～
7月15日(月・祝) 39日間
- 休 館 日 月曜日
※7月15日(月・祝)は開館し、翌日休館
- 観 覧 料 無料
- 展示作品 43件47点
- 関連イベント
九州陶磁文化館やきものセミナー(第1回)
「赤戯幸コレクションのみどころ」
令和6年6月15日(土)



展覧会図録
A5版 本文49ページ



展示風景(展示ホール)



展示風景(第5展示室)

～令和6年度企画展の報告～

瀬川竹生コレクション寄贈記念・特別企画展 江戸大皿百物語 ―躍動する青の世界―

稀代の大皿コレクター 故 瀬川竹生氏のコレクション100枚が当館に寄贈されたことを記念して、有田大皿の魅力を紹介する展覧会を開催しました。横浜にお住まいだった瀬川竹生氏が集めた有田の大皿のコレクションは、60cm以上の最大級のものを含む迫力のあるコレクションです。100枚の大皿には、歌麿や広重の浮世絵をはじめ、東海道五十三次、金太郎、浦島太郎、蟹気楼、名酒の樽、鯉の滝登りなど、当時の文学、信仰や名物を反映する様々なテーマが生き生きと描かれ、ダイナミックな画力に圧倒されます。すべての絵具は青色に深みがあり美しいものです。

大皿は宴の中心に据えられ、大皿を囲んで人々が集い、食事をとりわけて絆をつないできました。日本の食事を豊かなものに発展させた象徴とも言えるべきもので、SAGA2024国スポ・全障スポにあわせて開催し、佐賀県が誇る陶磁文化の繊細かつ大胆な側面をご覧くださいました。

- 主 催 佐賀県立九州陶磁文化館
- 会 場 佐賀県立九州陶磁文化館
第3～5展示室
- 会 期 令和6年(2024)9月7日(土)～
11月4日(月・祝) 51日間
- 休 館 日 月曜日
※9月16日、23日、10月14日(月・祝)は
開館し、翌日休館
- 観 覧 料 無料
- 展示作品 120件120点
- 関連イベント
- (1)講演会「大皿の時代 瀬川竹生コレクションより」
講師：荒川正明氏(学習院大学教授)
日時：令和6年9月7日(土) 13:30～15:00
会場：佐賀県立九州陶磁文化館 講堂
- (2)九州陶磁文化館やきものセミナー
第5回「魅惑の有田大皿」
日時：令和6年9月21日(土) 13:30～15:00
会場：佐賀県立九州陶磁文化館 研修室1
第6回「有田大皿のみどころ―裏側の世界―」
日時：令和6年10月19日(土) 13:30～15:00
会場：佐賀県立九州陶磁文化館 講堂



開会式テープカット



内覧会



展示風景

～令和7年度企画展のお知らせ～

開館45周年記念 特別企画展 初期伊万里ビッグバン ー日本磁器始まりの全貌ー

今から約400年前、肥前地方では突如として白く硬質な磁器が開発され、産業として急速に発展しました。その最初期には多久や伊万里で磁器の開発が試みられ、有田に移って爆発的に生産が発達したことが明らかになってきています。

開館45周年を記念して開催する本展覧会では、現代を生きる私たちをも魅了する初期伊万里の優品と草創期の資料を通じて、これまでの研究成果をもとにその起源と発展の真相に迫ります。

- 主催 佐賀県立九州陶磁文化館
- 会場 佐賀県立九州陶磁文化館
第3～5展示室
- 会期 令和7年(2025年)10月4日(土)～
12月7日(日) 56日間
- 休館日 月曜日(祝日は開館し、翌日休館)
10月6日、14日、20日、27日、
11月4日、10日、17日、25日
- 観覧料 有料
- 展示作品 160件(予定)

○関連イベント

①記念講演会

令和7年(2025年)10月5日(日)14時

講師：大橋康二(当館名誉顧問)

②担当学芸員によるギャラリートーク

会期中の毎週日曜日(10月5日を除く)

14時～14時30分

※イベントの詳細と最新の情報は当館ホームページに掲載いたします。



染付蓮文皿
肥前 有田 1610～1630年代
佐賀県立九州陶磁文化館所蔵
山口陽二氏寄贈



佐賀県重要文化財 染付山水文水指
肥前 有田 1610～1630年代
佐賀県立九州陶磁文化館所蔵



瑠璃釉鏤文輪花小鉢
肥前 有田 1610～1630年代
佐賀県立九州陶磁文化館所蔵
柴田夫妻コレクション

～令和7年度企画展のお知らせ～

新収蔵品展

令和5年度から6年度にかけて新たに収蔵した資料を展示。鍋島藩窯や現代作まで幅広く紹介します。

- 主 催 佐賀県立九州陶磁文化館
- 会 場 佐賀県立九州陶磁文化館 第5展示室等
- 会 期 令和8年（2026年）1月28日（水）～2月26日（木）
- 休 館 日 月曜日（祝日は開館し、翌日休館）
※2月23日（月・祝）は開館し、翌日休館
- 観 覧 料 無料
- 展示作品 約50件（予定）



点文蘭引
肥前 19世紀
佐賀県立九州陶磁文化館所蔵 香月孝氏寄贈



中野月白瓷壺
福島善三（重要無形文化財保持者） 2022年
佐賀県立九州陶磁文化館所蔵



染付蓮葉鷺文変形皿
肥前 有田 1650～1660年代
佐賀県立九州陶磁文化館所蔵 佐賀古澤家寄贈



染付葛文木瓜形小皿
肥前 鍋島藩窯 1780～1810年代
佐賀県立九州陶磁文化館所蔵

調査ノート

かすがい

銚止めによる陶磁器修理

巖由季子（佐賀県立九州陶磁文化館 学芸員）

瀬川竹生コレクションには、「銚止（留）め」「銚継ぎ」と呼ばれる修理が施された大皿が3件ある。このうち〈染付異国風俗文大皿〉（図1）には、皿を二分する割れをつなぐように皿の裏側に銚が打たれている。いずれも修理に関する記録が付属しないため、修理の時期や目的は不明である。

陶磁器に小さな穴を穿ち、金属製の銚を嵌め込む銚止めは、破損したものをつなぎあわせるために行う場合と、ひびが広がらないように予防的な処置として行う場合がある。銚による陶磁器修理は中国で古くから行われ、唐時代の出土例が知られるという（注1）。また、絵画資料に銚止めで修理された陶磁器が描かれた例に嘉靖37（1558）年の『煮茶図巻』（王問筆、国立故宫博物院所蔵）（図2）がある（注2）。

ヨーロッパでも銚を用いる陶磁器修理が行われ、18世紀には各地に修理業者が存在した（注3）。1770年頃のロンドンの陶磁器修理業者の広告に「China-Rivetter」とあり、金属製の銚と思われる“rivet”を使用した技法で、それまでにイギリスにはなかった新規の技法であると記されている。1850年代頃には陶磁器収集家やアマチュア向けの修理技法の手引書が出版され、銚を用いる陶磁器修理が普及していた様子が見えてくる。

日本では、中国磁器の輸入と使用を通して銚止めが知られていたと思われる。一乗谷朝倉氏遺跡（福井市）などで銚止めの痕跡と思われる小さな穴が開けられた中国の白磁や青磁の出土例がある（注4）。また、16世紀中頃の史料に「銚茶碗」の語が見られることから、修理された碗が茶の湯の道具としても用いられたことがわかる（注5）。これらは中国で修理されたアンティークである可能性が高く、日本国内で銚止めが施されたことを示す資料は多くない。一例として、〈青磁輪花茶碗 銘馬蝗絆〉（東京国立博物館所蔵）（図3）の江戸時代後期の写しが挙げられる。本歌には、日本にもたらされた後、中国で修理され再び日本に送られた等の由来を記した「馬蝗絆茶甌記」が伴い、銚止めが施された伝世品として知られている。19世紀に複数の写しが製作され（注6）、三代高橋道八（1811-1879）が製作した写し（東京国立博物館所蔵）（図4）は本歌とほぼ同寸に作られ、鉄製の銚が打たれている（注7）。そのほか、〈青磁貼花牡丹文花瓶〉（北野天満宮所蔵）は欠損部分を永楽和全（1823-1896）が製作し、本体との接合に銚を用いている。修理時期は、和全の活動期間から19世紀中葉から後半頃であると推定さ

れている（注8）。この頃の日本では、ガラスの粉末を熱して接着に用いる焼継ぎが磁器修理の技法として普及しており、銚止めは一般的ではなかった可能性が高い。先に挙げた銚の使用例は、伝世の中国陶磁への関心に基づく特殊な事例であったかもしれない。中国陶磁に見られる修理の一つとして受容された一方で、穴を穿って新たな瑕を作り、目立つ銚で固定することに抵抗を感じたためか、修理された青磁花生について「焼物に銚を打つこと、心得がたき事」と記されることもあった（注9）。

日本における銚止めの本格的な広がり、近代の中国人移民に因ると考えられてきた（注10）。19世紀末頃から20世紀初頭にかけて中国大陆などで銚止めを目にした人々は、日本では見られない技術として注目し、焼継ぎと比較した（注11）。その後は在日中国人人口の増加に伴い、1920年代頃までに「茶碗つぎ銚止め」を行う職人が多く日本に渡ったとされる（注12）。ある職人は、銚止めが「内地には類例少なき業務」であることから「相当の需用」があり、少なくとも収入を得ていた。彼らの出身地である山東省では、農家の副業として銚止め修理を行う習慣があるという（注13）。しかし、銚止めは労働不許可業種であるとされ、労働禁止処分を受けた。政府の就業規制が1920年代後半以降に厳格化すると、1930年代以降は日本に住む中国の人々の主要な業種を占めなくなった（注14）。したがって、日本では銚止めが20世紀初め頃から広く知られるようになり、1920年代前半に活発に行われたものの、1930年代頃を下限に担い手が減少したと言える。

冒頭に挙げた大皿（図1）は、旧蔵者である瀬川竹生氏が日本国内で入手されている。国内で伝世し、修理が行われたと仮定すると、銚止めの普及年代からその修理時期は20世紀前半の可能性はある。しかし、瀬川氏入手以前の来歴は明らかではないことから、欧米のコレクターにより日本陶磁の収集がさかんに行われた19世紀後半以降、ヨーロッパで修理された可能性も否定できない。いずれにせよ、修理が行われた時期には江戸時代の宴の器という本来の役目を終えており、鑑賞を目的として修理が行われたのかもしれない。

人の手から手へと伝えられる過程で施された修理であるが、近年、国内外の博物館では修理自体が歴史的に重要であると考えられる場合を除き、劣化した銚を取り除いて現代の素材と技術で再修理することも少なくない。当館の大皿の修理歴は残念ながら不詳だが、

現在も割れはすき間なく繋ぎ止められ、直径42cmの重い大皿を問題なく取り扱うことができる。修理部分の変化を注視しつつ、当面の間は銚を伴った姿でお目にかかるであろうと思われる。

注

- 1 謝明良『陶瓷修補術的文化史』国立台湾大学出版中心、2018年、54-55頁。
- 2 注1書、61-62頁。
- 3 以下、ヨーロッパにおける銚止めについては下記の文献を参照・引用した。Isabell Garachon, Old Repairs of China and Glass, The Rijksmuseum Bulletin, vol.58, 2010.
- 4 国立歴史民俗博物館編『陶磁器の文化史』歴史民俗博物館振興会、1998年、104頁。
- 5 「カスカヒ茶ワン」（『清玩名物記』。千宗室監修・筒井絃一編『茶道学大系10 茶の古典』淡交社、2001年、389頁）、「カス鉢ガヒ茶碗」（『茶具備討集』。天文23年成立、享和2（1803）年刊、早稲田大学図書館本）等。
- 6 三笠景子「茶の湯を創った青磁茶碗」『茶の湯の歴史を問い直す』筑摩書房、2022年、325・340頁。
- 7 ColBase(https://colbase.nich.go.jp/collection_item/tnm/G-5891?locale=ja)（最終閲覧日:2025年1月25日）
- 8 尾野善裕「北野天満宮所蔵青磁貼付牡丹唐草文花瓶の朱漆銘と修理」『学叢』第21号、1999年、106頁。
- 9 山科道安『槐記』享保12年3月29日条。（千宗室等編『茶道古典全集』第5巻、淡交社、1977年、135頁。）
- 10 巖山康彦『骨董勉強ノオト』新潮社、1979年、61頁。森達也「龍泉窯青瓷雜感(4)銚留について」日本陶磁協会『陶説』716号、2012年。
- 11 日清戦争に軍医として従軍し中国大陆に渡った渡辺重綱は、中国で行われる銚止めについて「我国の焼継法と同じ功用」と記し、職人を訪ねて作業を見学した（『征清紀行』1896年）。
- 12 後藤朝太郎による「支那人の生活」（東洋協会『東洋』1923年、90頁。）に、「日本方面に来る者は最近済南府からの茶碗ツギ銚止めの連中も殖えてきたが多くは浙江省辺りから推寄せてくる。殊に寧波から温州方面の者が一番多い」とある。
- 13 「支那銚止職人ニ関スル件」内務省警保局『外事警察関係例規集』1931年、384-386頁。
- 14 阿部泰久「1920年代の東京府における中国人労働者の就業構造と居住文化」『人文地理』第51巻第1号、1999年、41-44頁。

参考文献

謝明良『陶瓷修補術的文化史』国立台湾大学出版中心、2018年。



図1 染付異国風俗文大皿 瀬川竹生コレクション
裏側に複数の銚が打たれている（右図）

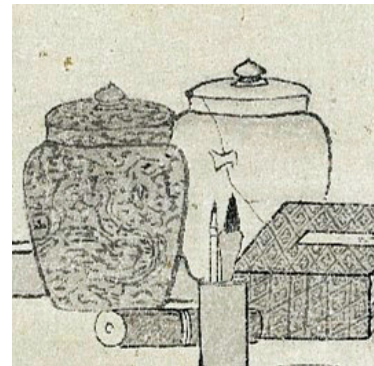
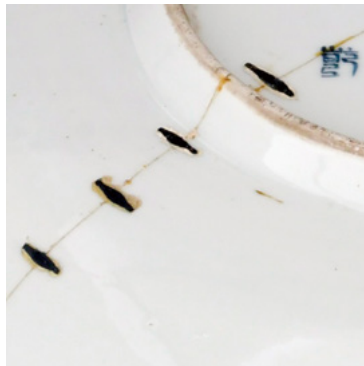


図2 王問 煮茶図巻（部分）
國立故宮博物院所蔵



図3 重要文化財 青磁輪花茶碗 銘馬蝗絆
南宋時代・13世紀
口径15.4cm 高6.7cm
東京国立博物館所蔵



図4 三代代高橋道八 青磁輪花茶碗
江戸時代・19世紀
口径15.3cm 高6.5cm
東京国立博物館所蔵

図3・4画像出典：ColBase (<https://colbase.nich.go.jp>)

肥前磁器文様の構図(1)

有田大皿の表文様について ―事例1 染付牡丹蝶文大皿―

令和6年に開催した瀬川竹生コレクション展は、故瀬川竹生氏の審美眼に裏打ちされた美しい大皿が並び、さながら絵画展のような印象さえ受けた。では、瀬川氏が見出された大皿の美、その源泉はどこか。高い技術力による繊細な線書き、真に迫る描写、迫力のあるモチーフ、それらは表文様を構成する重要な要素だが、それらが皿という円形の画面において文様をどのように構成しているのか。これが最終的な大皿の美を左右するものと考え。つまりは、どんな構図で文様が描かれているのかを知ることで、大皿の美、ひいては肥前磁器の魅力の根源に迫れるのではないだろうか。そこで、絵画的な構図の考え方を参考に肥前磁器の文様の分析を行ってみたい。

まず事例として、瀬川竹生コレクションから染付牡丹蝶文大皿(図1)の構図を考えてみる。この皿は各文様を配置する上で基準となる構造線^(注)が軸として文様中に表されている。すなわち図2の赤線で示した部分である。これを目印に文様を見ていくと、牡丹と蝶が対置されていることが分かる(図3)。画面を上下左右に割った際の左上と右下という対角の位置である。また、皿には4重の同心円(図2の黄色線)が描かれ、大から小へ自然と目が中心部に導かれる。それと同時に、中心部と同じ文様が描かれた蝶や大きくかつコントラストが高くなるように描かれた牡丹が目を引き。籬文様を境として、画面手前の蝶や牡丹がここにおける主題と見ることができ、この2つが直線状に並んでいることで画面が整然としてすっきり見える。さらに主題、構造線、背景で三層構造となり奥行きも感じさせる。

人の目は、コントラストの高い部分に引付けられる。画面右下の牡丹エリアでは、背景は染付の青一色で、そこに白い牡丹を描く。地と図の関係で言えば、地を青に図を白にすることで明暗差となり図である牡丹が目立つ。蝶エリアではどうか。

画面手前の蝶では、羽に青の線描きで地文様が描かれているが、背景が白いので総じて明るく見える。蝶の背景は牡丹と同様に青の塗りつぶしのため、明暗差となる。一方で、画面奥の蝶は全体を青に塗られているが、地となる部分を白くすることで、これもまた明暗差を生み蝶が目立つ。加えて、青一色では重々しくなるところを、一部を白く抜くことで画面の中の青と白のバランスまでとっているのである。

このように文様の配置、色の濃さのバランスなど描



図1 染付牡丹蝶文大皿
佐賀県立九州陶磁文化館所蔵 瀬川竹生コレクション

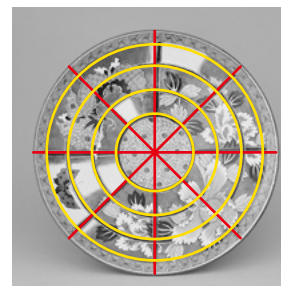


図2 構造線と同心円



図3 蝶と牡丹の対置

画力だけではなく、総体でもって大皿の美が形成されているといえる。

(宮木貴史)

注

秋田麻早子氏は絵の柱となる線を「構造線」と称した(秋田 2019)。ここでは画面を八方に割り、文様を割付ける基準となる線をいう。なお、有田では皿に点を打って画面割りの目印とする。文様の配置の方法については伝統工芸士の中尾正三郎氏より御教示いただいた。末筆ながら記して感謝申し上げます。

参考文献

秋田麻早子 2019『絵を見る技術―名画の構造を読み解く』株式会社朝日出版社
猪俣岩生 2020『「構図力」入門:「絵」の良し悪しは構図で決まる』eBook